



マニラ日本人学校 帰国報告

音更町立音更小学校 教諭 大西 啓 就



1 はじめに

最近では、よくフィリピンがTV等で報道・紹介される。内容は、某雑誌で世界一になったフィリピンのリゾート島の特集、フィリピン南部で起きているISとの戦い、そしてドゥテルテ大統領の麻薬撲滅運動や過激発言の件。日本の友人や家族からも「～があったけど、大丈夫なの」と派遣中、何度も連絡が来た。最近、フィリピンという言葉がTV欄等で見かけるが、赴任先が決まった時点ではあまり情報が無く、赴任が決まった日、真っ先に書店にマニラの



自宅の窓からの景色。大都会に驚く。

本を探しに行ったが、セブ島などのリゾート地などの本ばかりで、マニラの詳しい本はほとんど無く、インターネットでは、「世界一、日本人が銃で殺される市」「空気汚染が酷い」など負の情報ばかりだった。とても不安のままに派遣した記憶がとても懐かしい。

3年間の派遣を終え、「フィリピンはどんな国？」と聞かれたら「日本人に優しく、とても住みやすい国」と答えるだろう。高層マンションと窓の無いトタン屋根の家が隣接するなど貧富の差が激しい国だが、貧しい中でも笑顔で力強く生きている姿に学ぶことが多く、また、日本人にとっても友好的な人柄に癒されたことが多かった。さらに、どこでも英語が通じるというのもフィリピンの一つの魅力かもしれない。今回のレポートの中で、私の感じたフィリピンの素晴らしさや現地の教育についてお伝えし、一人でも多くの方が興味をもち、フィリピンを訪れてほしいと思っている。

セブ、ボホール、エルニドは、最近注目のリゾート地です。

(今年度 新千歳～マニラの直行便が就航する)

2 派遣国について

概要 (フィリピン外務省HP 参照)

フィリピンの面積は、約30万km²で日本の約8割である。日本と同じく島国で、ルソン島やミンダナオ島を中心に7000余りの島々がある。人口は、約1億100万人。首都はマニラで、約1300万人が住んでいる。島の数が多いが、国の大きさ、人口、首都圏の規模など、日本にとっても似ている印象をもつ。人種も多様で、マレー系が主体であるが中国系、スペイン系なども多い。子ども、若者の人口が多く、平均寿命は短く(男性65歳、女性72歳)この点では、日本と大きく異なる。最近、中国人・韓国人の移住者が多く、中国人街や韓国人街が進んでいる地域もある。島国なので約80近い言語があるが、公用語はタガログ語(フィリピーノ語)と英語である。世界で3番目に英語を話す人が多いこの国では、ほとんどの場所で英語が通用する。東、東南アジアでは、イスラム教の宗教問題が話題になっているが、フィリピンは、ASEAN唯一のキリスト教国であり、国民の83%がローマ・カトリック、10%がキリスト教となっている。そのため、どの町にも教会が多く見られる。



気候は亜熱帯で、四季はなく「雨季」(6月～10月)と「乾季」(11月～5月)の二季に分かれている。雨季は、毎日雷鳴が響き、乾季は、全く雨が降らない。マニラでは、年間の最低気温でも25℃前後ととても暑い。3年間、外で一度も長袖を着る機会がなかった。特に4・5月が最も暑く、北海道出発した日の朝が-3℃、マニラの到着した日が37℃。この気温差にはさすがにびっくりした。家族共々、体調を崩さなかったのが幸이었다。

マニラ日本人学校は、ルソン島にある首都メトロマニラにある。メトロマニラは、マニラ市、



排気ガスを排出する原因となっている庶民の乗り物ジブニー(乗合バス)

ケソン市、タギック市など16市1町により構成されている。このメトロマニラで人口約2200万人が住んでいる。日本人学校は、タギック市にあり、周りにはたくさんのインターナショナルスクールや大学があり学園都市的な雰囲気がある。大きなビルやショッピングモール、ホテルがどんどん建ち近代化が目まぐるしい。特に空港近くの湾岸エリアでは、カジノ産業で国を発展させる政策からたくさんの大型ホテルが建設中

アのラスベガス化を目指す報道もある。近代化が進ん

で

いる一方、慢性的な交通渋滞や安定しない治安問題、大気汚染など生活する上での問題は少なくない。

3 マニラ日本人学校について

(1) 学校の概要

マニラ日本人学校は、昭和43年に大使館附属広報文化センターに開校、昭和50年に大使館附属マニラ日本人としてフィリピン国に認可された。2度の移転を経て、平成13年に現校舎のあるタギック市へ移転した。今年度、創立50周年を迎える。現在、小学部約380名、中学部約80名 計約460名からなる小中併設校である。一時期、児童生徒数が減少していたが、日系企業の進出が進み、ここ3年で80名近い児童・生徒増になっている。マニラ日本人学校は、学校運営理事会が運営している「私立校」であり、普段はMJS（Manila Japanese School）の愛称で呼ばれている。入学及び通学資格は、「日本国籍を有する子」「原則、保護者との同居」など複数の条件がある。この条件の設定の背景には、現在20%を超える児童生徒は、国際結婚家庭児を占める現状がある。一番多いのは、父が日本人、母がフィリピン人である。国際結婚家庭児の中には、家庭環境から日本語の習得が困難な児童も少なくない。そのため、小学部の児童を対象として、放課後に日本語学級を開設し、日本語習得に担任を中心に対応している。児童・生徒は、7台のスクールバス及び自家用車で通学しており、安全上、徒歩の通学は認めていない。

教育課程は、日本と同じであり、年間200～205日の授業日数を確保している。日本の祝祭日は憲法に関わる2日のみ（5月3日、11月3日）休校日とし、あとはフィリピンの祝祭日に合わせている。ただ、自然災害や各国の大統領が集まる会議（ASEAN会議等）による突然の臨休が1年に数日発生するため、できるだけ授業時数の確保に努めている。

(2) 職員構成・人数と施設

文部科学省派遣教員は19名、財団専任講師が7人、現地採用教員が2名の28名の日本人教員で構成されている。その他に、英会話講師（フィリピン人）が6名、水泳講師が2名（フィリピン人）がいる。また、事務室には、日本人の事務長を始め、事務補、メカニック、ドライバー、会計士など6名のフィリピン人が働いている。又、印刷室に1名常駐したスタッフや、24時間

勤務のガードマン、ガーディナーとクリーナーさんなど総勢70名近い方が校内で働いている。

学校の敷地面積は4000坪あり、とても広くゆったりと作られている。普通教室、2つの体育館、プール、図書室、英会話室、会議室、第1・2音楽室、図工室などがあり、また、文房具や水を買える小さい売店もある。全ての教室と第1体育館にエアコンが整備されている。

ICT環境にも力を入れ、全クラスに50型の電子黒板を設置し、昨年度、各学年の主要4教科のデジタル教科

私立学校ならではの予算の使い方だと感じた。

日本人学校の外観。3階建ての開放感のある校舎。



校門前で爆弾チェックをするガードマン。笑顔で出迎えてくれます。書を購入した。

(3) 特色ある教育活動

①教科担任制

教員の得意なことを生かすことをねらいとして、小学部1年生より一部の教科で「教科担任制」を行っている。音楽・図工については、中学部の先生方がたくさんの学年を受け持ち、系統性立てた指導を行っている。たくさんの目で子どもたちを育てる環境があり、担任が問題を抱え込まないメリットもある。

②英会話

小学部1～6年生は週2時間、中学部は週1時間の「英会話」の授業を習熟度別クラスで実施している。会話力育成に力を入れ、フィリピン人の英会話講師が指導に当たっている。現地に滞在している期間が長い児童・生徒ほど英会話力に長け、又、日ごろの生活から英語を使うことも多いこともあり、児童・生徒の英会話を身につけるスピードは速い。学校内で年3回英検を実施していて、小学生低学年から5級、4級、3級を受験する子も多く、高学年の小学生が準2級を合格する割合も多い。



各クラス10名前後で行う英会話。子どもたちも積極的である。

③水泳指導

暖かい気候を生かして、1年間を通して各クラスごとに週1時間の水泳授業に取り組んでいる。7月には、ブロックごとの水泳記録会があり、大勢の保護者が来て盛大に行われる。2名のフィリピン人講師、体育専科教員の3名体制がレベル別に指導を行うためきめ細かい指導ができ、泳ぎの苦手な子どももどんどん上達をする。



7月に行われる水泳記録会。一人2種目は、最低泳ぎます。

④現地校との交流

現地校との交流。習字を通して交流を図っています。小学部4年生



1年に数回、現地の私立校と全校児童生徒で交流会が行われる。MJSでは、この交流会に向けて学年ごとに「習字」「日本古来の遊び」「日本ならではの踊り」など伝統文化を紹介・体験させたり、ゲームを企画したりして交流をしている。現地校では、休み時間に「ミリエンダ」（フィリピンの学校は、午前10時におやつを食べる時間がある。おやつ時間をミリエンダと言う）としてフィリピン伝統のお菓子を一緒に食べたり、フィリピンの国歌を歌ってくれたりそれぞれが特徴を生かした交流を行っている。

⑤大運動会とMJSフェスティバル

1年の2大行事である運動会とフェスティバル（文化祭）。今年度からは、9月末に運動会、1月末にフェスティバルが行われる。運動会は、各クラスを2つに分け紅白対抗。フェスティバルは、学年でそれぞれ劇や音楽等が発表される。どちらの行事も、中学生を中心に盛り上がり、

学級・学年の組織力を高める大事な行事である。特徴的なのは、この2つの行事を現地理解教育に繋げている点である。運動会では、小学部3・4年生が毎年、フィリピンの伝統的な踊りを披露し、フェスティバルでは、現地の偉人をテーマにした劇を行う学年もある。行事を通して、現地理解に迫る、日本人学校の特徴の一つであった。

4 現地理解教育を生かした教育活動と教師力を高める取り組み (日本人学校で取り組んだこと)

日本人学校では、1年目小学部6年担任、2・3年目教務主任を務めた。どちらもとても重要なポジションだったが、今まで経験したことの無い仕事に関わることができた。私が現地で取り組んだことの一部と成果と課題について以下のようにまとめる。

1 ICT機器を活用した授業展開

マニラ日本人学校の特色の一つは、全クラスに50型の電子黒板・書画カメラがあることである。私が赴任する前の年に導入されたものだが、赴任した時はその設備の充実さに驚かされた。また、速度はとても遅いが校内全体にインターネット環境も整っている。

本校勤務1年次にFort Bonifacio Elementary School（公立小学校）という現地校の視察を行った。この学校を管轄しているマカティ市は、教育不備が多いフィリピンの中にあって授業料・学用品などが無料で支給されている。さて、今回小学6年生の理科の授業を見たが、子どもたちは、教科書・ノートを使わずタブレットを一人一台ずつ使い授業に参加していた。また、教師は1時間パワーポイントを使い自作教材を作り、授業構成を行っていた。

<現地校の授業の様子>



食物連鎖の授業をパワーポイントで行う様子。（左）授業後半には、ゲームソフトを使い復習をしていた。（中）他の教科でも活用している様子が見られた。（右）



2年目に見学した Colegio de San Augustin の Art の授業。これも自作のパワーポイント教材。子ども達にもとても分かりやすく色の濃淡について説明されていた。

このパワーポイントによる授業については、2年目以降に見学した Colegio de San Augustin(幼小中高一貫私立学校), International school Manila(幼小中高一貫私立学校), レイテ島の Tanauanll Central School (公立小学校) においても先生方がICT機器を使って授業を進める様子がとても多く見られた。その多くが、パワーポイントを使ってプロジェクターでスクリーンや壁に写し、1時間の授業を組み立てるものだった。理科の先生に話を伺うと、ほとんどの単元・授業でパワーポイント教材を作って授業を進めているという話だった。授業の様子から共通して言えることとして、40～45人の児童・生徒がとても興味・関心をもって授業に向かっている姿が見られたことだ。そこで、この1年目の経験を活かし、2年目・3年目で中・高学年の理科を受け持ったので、毎時間必ずICT機器を取り入れよう意識して授業展開を考えた。ただICTを取り入れるだけでなく、その中でより高い教育効果に結びつけるためにICT活用に加えて、指導のねらいの把握、日頃からの児童生徒の実態把握、授業におけるタイミング、発問・指示や説明といった従来からの授業技術との融合も合わせて見つめ直した。2年目の研修のテーマであった「効果のある発問」の観点にも合わせてICTの活用を考えることにした。また、提示した情報について説明等をした上で、従来通り重要な点は板書をし、児童生徒にノートをとらせるという点も大切にした。

さて、日本人学校のICTを生かせるツールとして、インターネットの動画・画像、NHK For SchoolのTV番組、デジタル教科書、自作パワーポイント教材、書画カメラがあげられる。このツールをどう活用していくかを一単元ごとに使用計画を立てた。例えば、4年理科 単元名「季節と生き物(秋)」(4/4)では、以下のような単元計画を作った。

時間	内容	使うICT教材	活用場面
1	夏の様子と秋の様子を比較をし 気がついた事を書こう。	パワーポイント教材 書画カメラ(教科書) テレビ番組「ふしぎがいっぱい」	導入 課題解決 まとめ
2	身近な生き物の様子の変化を学ぼう	動画集(オリジナル作成) 「生き物の秋の過ごし方」 カブトムシ・テントウムシ等	課題把握
3	身近な植物の変化について学ぼう	デジタル教科書(ツルレイシの成長)	問題解決
4	復習・単元テスト	テレビ番組「大化学実験」	応用理解

理科の学習においては、教科書にのっている生き物や植物が気候の違いによりなかなか見当たらなかったり、生育しなかったりしたためにICTを活用する頻度が多く、計画も立てやすかった。パワーポイント教材はかなり作成したが、心がけている点として凝ったものを作らない、10分

程度で活用できるものを基準に作成し、効果的に生かし子ども達の集中を高めたいという思いのもと教材作りに努めた。

② 現地教材を活用した授業展開

フィリピンという国で授業をしている以上、現地理解・教材を活用することに力を入れた。理科、

技術等で使える内容をまとめ、データベース化した。次に受け持つ先生も継続的に教材を使えるメリットがある。

学年	教科	単元	使用ICT	内容
小学5年	理科	台風の動き	電子黒板「動画」	・台風「ヨランダ」の勢力・台風における被害
小学45年	理科	季節と生き物	電子黒板「Webページ」	・フィリピンにおける野菜作り・植物の育て方
小学6年	総合	フィリピンと日本の戦争	自作パワーポイント	・フィリピンの歴史の流れ（アヤラミュージアムの写真を使って）
小学6年	道徳	フィリピンに住む人々	自作パワーポイント	・パヤタスで生活する人々（視察の写真・動画を使って）
中学2年	技術	水産加工	電子黒板「動画」	・フィリピンにおける養殖業 ・爆弾を使った漁について

フィリピンには、アジア最大のスラムと言われているパヤタス地区がある。ゴミ山の麓にある集落には、約3万人が生活している。ゴミ山のゴミの中から売れる物を探し、1日150円ぐらいの収入を得る。私自身、この場所に行き、暮らす人々から直接話が聞けた経験は、とても大きく

道徳で授業を行ったが、子どもたちの反響も大きかった。

〈ゴミ山・パヤタスの写真〉



ゴミ山でゴミを探す人々。(左)各家庭にコンロは無く、料理は炭をおこして使う。(中)劣悪な環境の中で暮らしていても、カメラを向けると笑顔な子どもたち。(右)

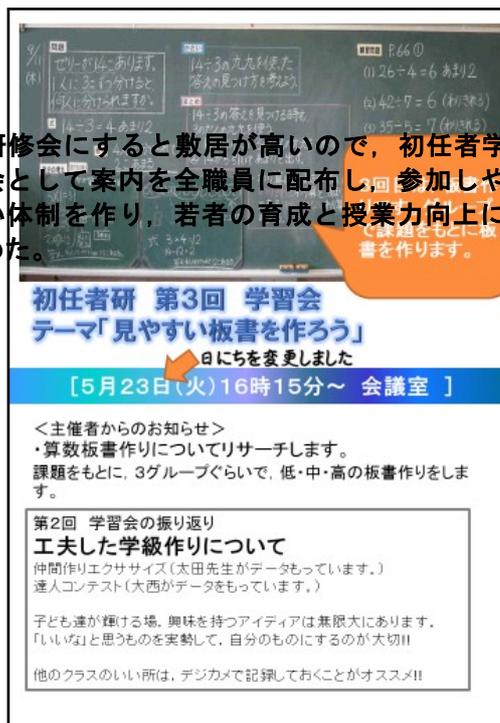
ICTと現地教材の融合が自分の中の理想であるが、なかなか融合する教材を見つけられなかったのが課題である。

③ 若手教員を全職員で育てる取り組み

マニラ日本人学校在籍3年目には、20代の教員が7名、30代前半が4名ととても若い先生が増えた。彼らの中には、日本人学校が最初の現場という先生も多く、授業方法や子どもの関わり方で悩みを抱えている先生も多かった。教務主任となった3年目、少しでも先生方の力を伸ばしたいと考え、メンター制度を活用し、校内独自の初任者学習会を立ち上げた。普段から、他の先生の授業を見ることは今までも行っていたが、さらに放課後に年間20回のプログラムを組み、教科指導・生徒指導などに関する研修を行った。毎回たくさんの先生方が参加し、意見を交わし学び合うことで学校全体の教師力が向上したと感じた。文部科学省からの採用人数が例年少なくなっている現状がある今日、教育の質を落とさないために全員で高め合っていく必要があると感じた。

他にも現地教材を使った技術科の木材加工制作，小学部あゆみ，中学部通知票のデータ化，約400番組に及びTV番組のデータ化等，和太鼓指導による各場面での日本文化の披露等，現地の特性や学校の課題解決のために力を発揮できた3年間であった。

研修会にすると敷居が高いので，初任者学習会として案内を全職員に配布し，参加しやすい体制を作り，若者の育成と授業力向上に努めた。



4 貧富の差の中に力強く生きる人々（フィリピンでの生活）

生活をするに当たって気を遣っていたのが，メイドとドライバーとの関係である。運転の禁止（運転マナーが悪く事故が多発している），現地へのお金の還元などから，日本人学校職員には，メイドとドライバーを雇うきまりがある。言葉



や習慣の違う彼らと意思疎通を取るまでにはとても時間がかかった。又，彼らにもそれぞれ家庭があり，「休みの日に車を使って良いだろうか？」など考える場面も多々あり，何時も自由に使えない不自由さもあった。フィリピン人は，人前で怒られるのを最も嫌う。住み込みで住んでいるメイドとは，慣れない英語で言葉を選びながらルールなどを確認した。ただ，1年・2年と一緒に生活していると，お互いの気持ちが分かり家族の一員となり，帰国時には，とても寂しい気持ちになった。

日本人の住んでいるエリアは，おもに3つのエリアに分かれる。それぞれがとても治安が良く，日本人を始め西洋人，アジア人，フィリピン人日本米コシヒカリ。味は，遜色なく美味しい。

富裕層が多く住んでいる。日本食を含めたくさんの飲食店やお店が立ち並

び，場所によっては，東京のお洒落な街並みと遜色ない場所もある。ただ，危険な地域も隣合わせなので，生活するエリア，夜の外出などでは，慎重に行動する必要がある。本校職員でも，スリ，路上強盗，スキミング，置き引きなどの被害にあっている。他のアジアの大都市と同じく，日本の企業の進出が進んでいるため「UNIQLO」「ダイソー」「無印」「吉野家」「元気寿司」「富士そば」「丸亀正麺」「串カツダルマ屋」「山頭火」「一風堂」「大阪王将」「マクドナルド」「ケンタッキー」など，地元帯広市よりも数多くの様々なジャンルの飲食店，お店があり生活する上では不自由をすることは，ほとんどなかった。基本的には，2倍程度の金額だが，フィリピン通貨（ペソ）の下落が続いているので現在は，ほぼ日本と同じ価格で日本食等を食べることができる。

物価は，ピンキリで日本の物は，約2倍程度で手に入る。我が家は，子どもが小さかったので，納豆や日本製のソーセージ，韓国のりなどを週末に日本グロッサリーで買いためし，ほぼ毎日食

べていた。フィリピン料理は、基本的に砂糖と醤油を使い、そして辛く無いので日本人の口にととても合う。私と妻は、メイドの作るフィリピン料理が大好きで、たまに無性に食べたくなることがある。

病院については、日本語の医師が常駐する日本人会クリニックがあり、子どもたちが病気になったときは、たくさんお世話

になった。言葉が通じることの素晴らしさをこういう場面でたくさん感じた。日本のテレビ番組などもネットを介してリアルタイムに見ることができたが、ネット整備が遅れているフィリピンでは、突然ネットが繋がらなくなるなど通信障害が頻繁にみられた。

最後にフィリピン人は、とても食べるのが好きである。フィリピンでは知らない人はいないファーストフード店「ジョリビー」には、朝・昼・晩、どの時間・場所でも混んでいる。「美味しい物に

お金をかける。」「1日4食は当たり前。」家族が集まり、笑顔でハンバーガーやチキンを食べ

5 おわりに

3年間の派遣は私又は私たち家族にとって、とても貴重で意義のあるものだった。メイド・ドライバーとの生活、コンドミニアムのスタッフなど、文化・考え方の違う人々との生活の中で、当たり前に行っていた自分達の言動や発言を見直せる機会が多かった。また、家族をととても大切に

家族同然だったドライバーとメイド。



バスアテンドさんと記念写真

国民性から学ぶこともたくさんあり、私の人生観に大きな影響を与えてくれた。。日本人学校では、様々なことにひたむきに取り組む子どもたちと時間を共有できたことは何物にもかえがたい貴重な経験になった。フィリピンでの生活の中で様々なことを吸収し、たくましく育っている子どもたちには、日本の将来を担う人材として世界へ飛躍して行ってほしいと思う。

最後に3年間の任期を無事終えたのは、マニラ日本人会をはじめ、現地で出会ったフィリピン人の人々、同じ視点で協働できた教職員の皆さんのおかげである。心から感謝申し上げたい。3年間の経験・実践を今後の教育活動に生かし十勝の子ども達・先生に還元するとともに、日々研鑽と修養に努めていきたいと思う。



フィリピンの代表的な料理
シニガンスープ (左) チキンアドボ (右)